

抽象画に説明を加えることによる 鑑賞者の心理的变化について

阿部研究室 17L1048H 木村壮甫

1.はじめに

抽象画を鑑賞するにあたって、多くの人はその内容理解の難しさから作品を見ることを敬遠してしまっているのではないだろうか。抽象画を絵画初心者が理解することの難しさは O'hare(1967)などの多くの研究で明らかにされており、美術館の各展覧会の来場者数について検討した際にも、抽象画を扱った展覧会の方が具象画を扱った展示会と比較して来場者数が少ない傾向にある。そこで、本研究では、抽象画に説明を加えることによって作品の内容理解を促進し、ひいては作品そのものに対する興味を引き起こすということを目的として実験を2例行った。

2.実験1

2.1.目的

具象画と抽象画を比較した際に、抽象画の内容理解を困難にし、鑑賞者がフラストレーションを感じるのは、脳の情報処理方法の違いが原因である可能性がある。Kandel(2018)は、脳科学に基づく具象画鑑賞と抽象画鑑賞における最大の違いは、トップダウン処理とボトムアップ処理のどちらの処理が絵画鑑賞に多く用いられるかという点に見出せることを明らかにした。そこで、上記した脳の処理方法に原因を見出すことができるという論を実証することを目的として実験を行う。

2.2.方法

参加者：大学生以上の14名を対象として行った。実験に際して美術経験についての質問を行ったが、全ての被験者が専門的に美術の学習を行った経験がないと回答した。

刺激：絵画12点を用いた。絵画は具象画、抽象画と具象画の中心に位置すると考えられるもの、抽象画を各4点ずつ用いた。具象画、抽象画の判別にあたっては前述した岡田(1991)の基準に基づいて行った。

手続き：被験者問要因の実験計画を用いた。それぞれの作品を鑑賞後、作品に対する感想をSD法を用いて回答してもらった。全ての条件において、作品の内容理解について、作品鑑賞時の不快感について、作品を鑑賞した際に価値を感じたかについての3点で回答をしてもらった。その際、半数の被験者は抽象画に関して色をベースにした作品に関する説明の文章を読んでもらった上で回答を求めた。また、作品を見て感じたことを記述してもらう欄を設けた。

2.3.結果

結果は表1の通りになった。

最初に、説明がない場合における絵画の種類ごとの理解度並びに不快感の変化を確認する。作品が抽象的になっていくに連れて、作品の理解度は低下し不快感が上昇することが明らかになった。

表1 各条件における結果の平均

	理解度	不快感	価値
具象画条件	4.18	4.64	3.66
中間条件	3.79	4.27	3.70
抽象画条件(説明なし)	3.07	4.07	3.61
抽象画条件(説明あり)	2.50	3.61	3.54

続いて、抽象画に対して説明を加えた場合の印象評定の変化を確認する。説明を加えた時に理解度、不快感、作品に対する価値全ての項目で評定が低下することが明らかになった。

2.4.考察

説明がない場合における絵画の種類ごとの印象評定の変化について検討を行う。結果は先述した通りであり、抽象画に近づくにつれ理解度は低下し不快感が上昇するという仮説の通りになった。

抽象画における説明を加えた場合の印象評定の変化について検討を行う。結果は説明を加えたことで内容理解が損なわれるというものになった。一般に内容説明を加えることで作品理解は向上すると考えられているなかで、この結果が導き出された原因としては、作品説明に対する粒度が足りなかったことが考えられる。

今回の実験において作品に対して曖昧な説明を付け加えてしまったことにより、少ない情報に頼りながら作品鑑賞を行うことを強いてしまい、その結果、その作品から読み解くことのできる情報を制限してしまった可能性がある。例えば作品に人が描かれていた際に鑑賞者は、描写されている人の表情なども含めて作品の鑑賞を行う。しかし今回の説明では、「人がいる」という情報を提供しただけになってしまい、かえって作品に対する情報量を減らすことになってしまったことが作品の内容理解を逆に妨げるようになってしまったのではないかと考えられる。

3.実験2

3.1.目的

実験1の抽象画における説明を加えた場合の印象評定の変化についての検討において、仮説と異なる結果がでた理由の一つとして、作品説明の説明量が低かったことが考えられると述べた。そこで、作品説明の質を担保するため、美術館でされている説明を参考にして作品の説明をつけることとした。その上で、美術館において説明に含まれる要素である、(1)描写物解説などを含む「描写」、(2)時代背景や作者の経歴などを含む「背景」、(3)主観的評価や問いかけなどを含む「感情」の3要素のうち、どの

要素が鑑賞者の内容理解を促進し、興味を引き立てるのかという点について検証を行う。

3.2.方法

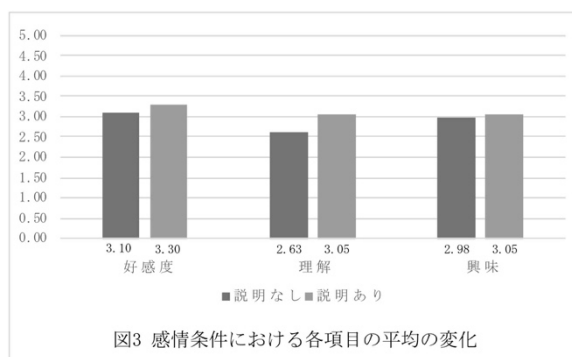
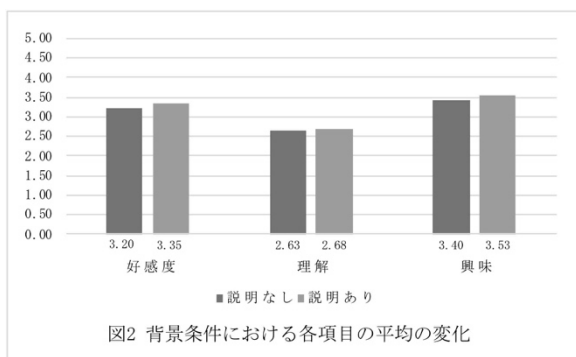
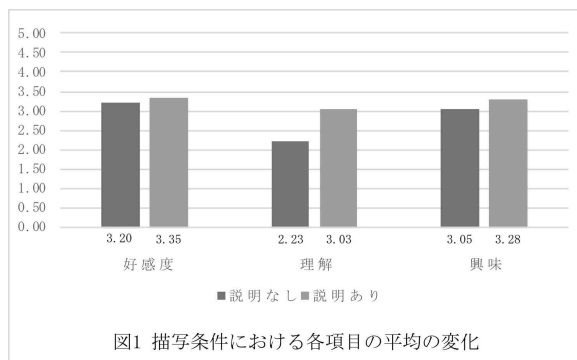
参加者:大学生以上の23名を対象として行った。実験に際して美術経験についての質問を行ったが、全ての被験者が専門的に美術の学習を行った経験がないと回答した。

刺激:絵画は抽象画5点を用いた。具象画、抽象画の判別にあたっては岡田(1991)の基準に基づいて行った。

手続き:被験者間要因の実験計画を用いた。実験の実施にあたっては被験者を3群に分け、それぞれ「描写」「背景」「感情」についての説明を記載した質問紙を配布した。なお、それぞれの説明は、美術館で行われる作品説明の総文字数を考慮して行った。それぞれの作品について説明がない状態で作品を鑑賞した後、作品に対する感想をSD法を用いて回答してもらった。全ての条件において、作品に対する好感度、作品に対する内容理解、作品に対する興味の3点について回答を求めた。その後、各絵画に関して説明を読んでもらい、全ての作品に対して再度鑑賞をさせた上で作品に対する感想をSD法を用いて回答を求めた。

3.3.結果

結果は図1~図3の通りになった。全ての説明条件において、説明を加えた場合は、説明を加えなかった場合と比較して数値が向上する結果となった。また、条件間での比較を行うと、背景条件においては、内容理解の項目で伸びが鈍かった。一方、感情条件において興味の項目で伸びが小さく、これは感情条件が興味をもっとも引き起こすとい仮説に反する結果となった。



3.4.考察

全ての説明条件において、説明を加えた場合、説明を加えなかった場合と比較して数値が向上する結果となった。これは、一定以上の情報を伴って説明を提示することが作品鑑賞の一助となることを示しており、実験1で作品説明を加えた際に評価が下がったことの原因として、説明が不十分であった場合かえって鑑賞の妨げになるという仮説を支持するものであるとみなすことができる。また、作品理解が説明を読んだ後に失われた例も実験の中でいくつか見られたが、それらの原因は作品説明の内容が最初に鑑賞した際に思い描いていた内容と異なっていた事、それに伴い内容理解に自信が持てなくなってしまうということによるものが多かった。そのことから、今回付け加えた説明の妥当性も保証することができる。

今回の実験において、背景条件で内容理解の数値の上昇が少なかった。このことから、背景条件に含まれる作品の制作方法や作者が作品を描いた時期に関する美術史的側面は作品の内容理解にあまり寄与しないということが確認できた。

続いて、感情の条件において興味の数値が上がらなかった原因について検討する。仮説は、感情条件に含まれる問いかけという行為によって鑑賞者がこれまで鑑賞していた際に持ち合わせていなかった観点を得ることにより作品に対する興味が向上するのではないかというものである。結果を確認すると、意図した通りに鑑賞した際に気づけなかった観点を得たことで興味が上がったというコメントが多くあった。そこで、平均を見たときに数値が向上しなかった原因として、説明を読んだ後に興味が薄れることになったという場合が他条件と比較して多かったことに注目した。(描写条件4例、背景条件5例、感情条件10例)この事象は、内容を理解したことに伴い引き起こされることが多いと考えられるが、もっとも説明を読んだことによる内容理解が促進された描写条件で同様な傾向が見られていないため他の要因を検討をする必要がある。

4.展望

実験2において、作品鑑賞における興味を失う原因が内容理解の他にも存在する可能性が示唆された。そこで、その原因を追加で実験を行うことで明らかにしたい。今回傾向として明らかにすることができなかったが、内容理解に伴い興味が失われる可能性は除外することができないため、そちらについてもさらに検討を加える必要があると考える。

また、実験1並びに2を通じて作品に対して説明をつける際の一定の質が求められることが明らかにされた。そこで情報提示量の閾値を求めることも必要であると考えられる。